

大沢谷内遺跡展

ーアスファルトを利用した縄文時代から中世の遺跡ー

2021 1.5 (火) ～3.28 (日)

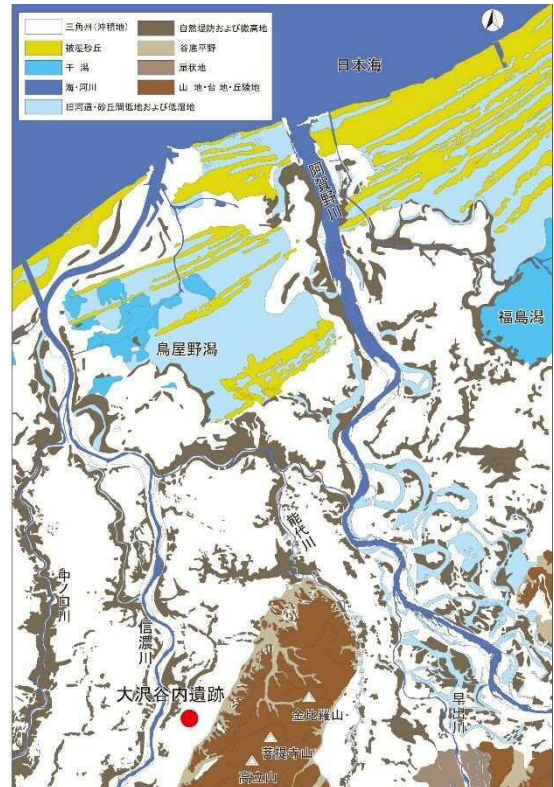
企画展開催にあたって

大沢谷内遺跡は新潟市秋葉区の南端域（旧小須戸町）に所在します。新津丘陵の西約 1 km、信濃川の東約 1.5 km の沖積地に位置し、現標高は約 4 m を測ります。

これまで国道 403 号小須戸田上バイパスの整備のほか、農道や市道建設に伴い計 25 次に及ぶ発掘調査が行われています。また、大沢谷内遺跡の北約 100m に位置し、大沢谷内遺跡と一連の遺跡と考えられる大沢谷内北遺跡の本発掘調査も実施されています。

大沢谷内遺跡では縄文時代から中世まで石油資源の利用が確認されました。周辺において明治 7（1874）年から平成 8（1996）年まで操業された石油の採掘や精製などに関わる施設は、わが国の近代エネルギー産業を知るうえで重要であることから、平成 30 年 10 月に「新津油田金津鉱場跡」として国史跡に指定されています。

令和 2 年 3 月、国道 403 号小須戸田上バイパスは全面供用開始となり、同時にそれに関わる大沢谷内遺跡の発掘調査報告書も全て刊行されました。この節目の年に、縄文時代から中世にかけてアスファルトを利用した大沢谷内遺跡や大沢谷内北遺跡の多様なあり方について、本企画展でまとめて見ていきたいと思ひます。



大沢谷内遺跡位置図

大沢谷内遺跡のこれまでの経過

大沢谷内遺跡は、昭和 32（1957）年に行われた暗渠工事の際、古代の土器が発見されたことで明らかになった遺跡です。昭和 54（1979）年刊行の『新潟県遺跡地図』に遺跡名と地点が初めて掲載され、「大沢谷内遺跡」の名称が周知されることとなります。

昭和 58（1983）年刊行の『小須戸町史』には、「大沢谷内遺跡」、「丸山遺跡」、「三軒屋敷遺跡」から出土した須恵器が掲載され、8 世紀後半の年代観が示されました。その後、上記の 3 遺跡に「丑ヶ島遺跡」を含めた 4 遺跡が、遺跡の立地や年代などから同一の集落跡の可能性が指摘され、昭和 60 年 8 月に行われた新潟県教育委員会による遺跡詳細分布調査の結果、4 遺跡を包括する形で、「大沢谷内遺跡」の範囲が再設定されました。

大沢谷内遺跡の本格的な発掘調査は、昭和 63（1988）年の小須戸町教育委員会による農道建設に伴う発掘調査（第 1～4 次調査）に始まります。

その後、国道 403 号小須戸田上バイパスの整備に伴う発掘調査や、市道鎌倉横川 1 号線関連の発掘調査が新潟市によって平成 16（2004）年から平成 28（2016）年まで実施されました（第 5～25 次調査）。

大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡におけるこれまでの調査一覧

大沢谷内遺跡								
調査 年次	調査年度	調査種別	主な成果	調査原因	調査主体	調査区	調査面積	備考
	560（1985）	分布調査		新潟県道跡詳細分布調査	新潟県			大沢谷内遺跡・丸山遺跡・丑ヶ鼻遺跡・三軒屋敷遺跡の4遺跡を統合し「大沢谷内遺跡」に。
1次	563（1988）	確認調査	平安時代の遺構・遺物を確認（本発掘調査範囲の確定）。	農免道路建設	小須戸町		76.84㎡	
2次	563（1988）	確認調査	本発掘調査範囲の北西側の確認を行う。遺構・遺物は出土せず。	農免道路建設	小須戸町		31㎡	
3次	563（1988）	本発掘調査	遺構はPit1基確認。遺物（平安時代土師器13点・須恵器22点）が少量出土。	農免道路建設	小須戸町	農道部	974.7㎡	
4次	H1（1989）	本発掘調査	平安時代の遺構・遺物を検出。主な遺構としてPit群、井戸、土坑、溝などを確認。	農免道路建設	小須戸町	農道部	940.5㎡	
5次	H16（2004）	確認調査	縄文・飛鳥・奈良・平安時代の遺構・遺物を確認。特に縄文時代晩期の遺物の発見は当初予想されておらず、「大沢谷内北遺跡」として登録。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	小須戸町		2,136㎡	
6次	H16（2004）	確認調査	奈良・平安時代の遺物を確認した。遺構の検出なし。	市道鎌倉横川1号線改良工事	新潟市		36.4㎡	
7次	H17（2005）	本発掘調査	主に上層の調査。飛鳥・奈良・平安・鎌倉・室町時代の遺構を多数確認。下層で当初確認されていなかった縄文時代晩期の遺構を新たに発見。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市	1～3区	1,912㎡	
8次	H17（2005）	確認調査	遺跡範囲確定のための追加確認調査。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市		771.4㎡	
9次	H18（2006）	本発掘調査	1区上下層と3区上面の調査および昨年度確認された縄文時代の調査を行い、1・3区の全面に縄文時代晩期中葉の包含層が分布していることを確認。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市	1・3区	4,479.07㎡	
10次	H18（2006）	確認調査	遺跡範囲確定のための追加確認調査。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市		22.5㎡	
11次	H19（2007）	本発掘調査	3区下層の調査。縄文時代の遺構確認を主に行う。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市	3区	1,400㎡	
12次	H20（2008）	本発掘調査	3区下層では縄文時代晩期中葉の遺構・遺物を検出。4区上層では飛鳥時代・古代・中世の集落跡を検出。調査区南の埋没谷からは大量の須恵器とともに祭祀木製品が出土し、県内では希少な飛鳥時代の集落跡と祭祀器を確認。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市	3・4区	5,600㎡	
13次	H21（2009）	確認調査	遺跡範囲確定のための追加確認調査。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市		200㎡	
14次	H21（2009）	本発掘調査	3・4区下層の調査を行い、縄文時代晩期中葉の集落跡の全容が明らかとなる。竈土遺構群・掘立柱建物・竈穴住居等が検出され、土坑の中には石器のデブが遺構も確認。遺物では多量の板状・塊状アスファルトが出土。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市	3・4区	5,920㎡	
15次	H21（2009）	本発掘調査	5区・6区ともに上層・下層の調査。上層では古墳時代から中世の遺構・遺物を確認。下層では縄文時代晩期最終末の遺構・遺物を検出。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市	5・6区	7,319㎡	
16次	H21（2009）	確認調査	平安時代の集落跡が北西に延びることを確認。	市道鎌倉横川1号線改良工事	新潟市			
17次	H22（2010）	本発掘調査	6区下層と7区の調査。6区下層では縄文時代晩期中葉の遺構・遺物を確認。竈穴住居2棟や竈土遺構などを確認。7区では平安・鎌倉・室町時代の遺構を確認。平安時代では排水施設が明確な小区面遺構を確認し、鎌倉・室町時代では溝・井戸などと類跡を検出。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市	6・7区	5,727㎡	
18次	H22（2010）	本発掘調査	平安時代および鎌倉・室町時代の集落跡および畑と考えられる軟状遺構を多数検出。特筆される遺物として古代の天然アスファルトの塊を確認。	市道鎌倉横川1号線改良工事	新潟市	市道部	823㎡	
19次	H23（2011）	本発掘調査	6・8・9区の調査。第17次調査の継続である6区下層では縄文時代晩期後半の遺構・遺物を確認。8・9区では奈良・平安・鎌倉時代の遺構・遺物を確認。9区で確認された方形の溝や小溝は、畑に関連する遺構と考えられる。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市	6・8・9区	5,330㎡	
20次	H24（2012）	本発掘調査	9区の調査。第19次調査の北側にあたる。奈良・平安・鎌倉時代の遺構・遺物を確認。遺構は掘立柱建物19棟や井戸71基などを検出。生産遺構が中心の南側の第19次調査地に対し、居住域を中心とした場所である。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市	9区	2,612㎡	
21次	H26（2013）	本発掘調査	8区の調査。第19次調査8区の北側にあたる。奈良・平安・鎌倉時代の遺構・遺物を確認。遺構は掘立柱建物9棟や井戸51基などを確認。微高地に位置し、居住域にあたる。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市	8区	2,130㎡	
22次	H26（2014）	確認調査	奈良・平安時代の遺構・遺物を確認。大沢谷内遺跡北西域の広がりを確認。畑に関連した遺構の可能性ある格子状の小溝を確認。	農免道路建設	新潟市		113㎡	
23次	H27（2015）	試掘調査	大沢谷内遺跡南西隣接地から南側を対象とした試掘調査。古墳へ古代の遺物を確認。天ヶ沢上谷内遺跡を周知化。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市		253.86㎡	
24次	H27（2015）	確認調査	縄文時代・平安時代の遺構・遺物を確認。大沢谷内遺跡の南西側の広がりを確認。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市		374.49㎡	
25次	H28（2016）	本発掘調査	10・11区の調査。9区南西側にあたる10区では古代水田跡を確認。11区では縄文時代晩期最終末と平安時代の遺物、古代の旧河道などを確認。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市	10・11区	2,757.27㎡	
大沢谷内北遺跡								
調査 年次	調査年度	調査種別	主な成果	調査原因	調査主体	調査区	調査面積	備考
2次	H17（2005）	確認調査	縄文時代晩期の土器がまとまって出土。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市		160㎡	大沢谷内遺跡第5次調査が1次調査を兼ねる。
3次	H19（2007）	本発掘調査	縄文時代晩期中葉後半の遺構・遺物などを確認。縄文時代の遺構は、土坑・竈土・土器集中・枕列がある。木製品では笠輪と櫛が出土。	一般国道403号（小須戸田上バイパス）	新潟市		3,043㎡	

大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡の概要

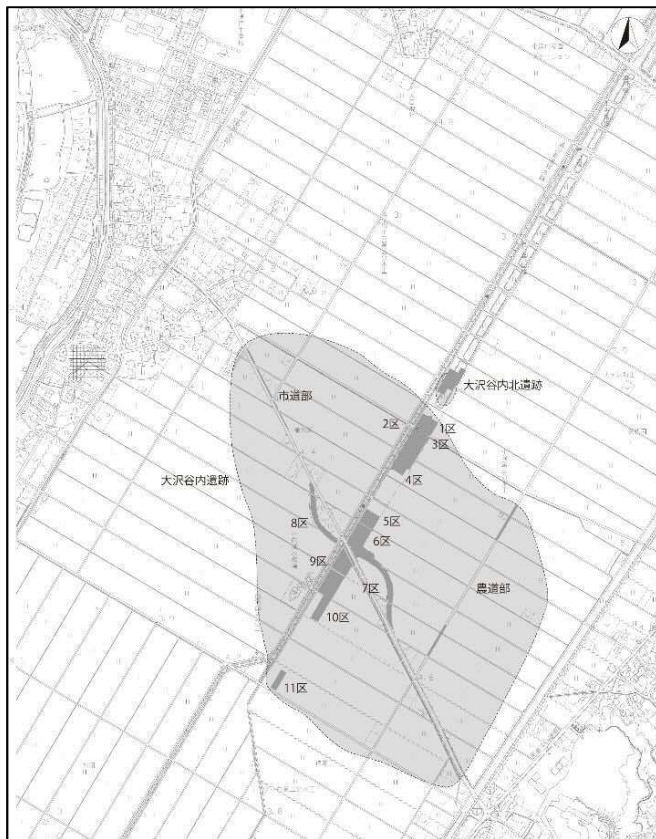
大沢谷内遺跡は、これまでの発掘調査によって様々な時代・時期に利用されていることが分かっています。

縄文時代晩期、弥生時代後期、古墳時代前・中期、飛鳥時代、古代（奈良時代、平安時代）、中世（鎌倉時代、室町時代）の遺構や遺物が確認されていますが、そのうち弥生時代後期と古墳時代前・中期の遺構や遺物は希薄で、不明な点が多い状況です。

また、大沢谷内遺跡の北約 100m に位置する大沢谷内北遺跡は縄文時代晩期に限定される遺跡で、大沢谷内遺跡と補完関係にあると考えられています。

出土遺物や遺構などから、大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡では、縄文時代や、飛鳥時代から中世にかけて遺跡周辺で採取できるアスファルトを活発に利用していたことが分かっています。

また、大沢谷内遺跡は飛鳥時代や奈良時代には役所（官衙）関連の遺跡であったと考えられ、平安時代から室町時代にかけても希少な遺物を所有し、大規模な水田を営んでいることから、公的性格を帯びた有力者の拠点集落であったと判断されます。



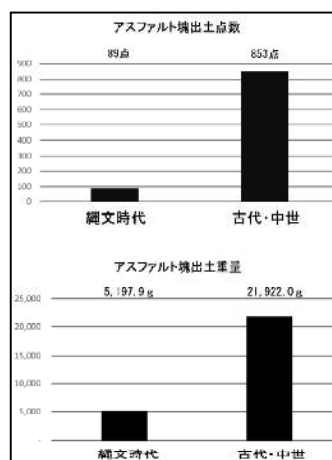
大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡の周知範囲と調査位置図

大沢谷内遺跡のアスファルト塊

大沢谷内遺跡では、これまでの発掘調査でアスファルトの塊（アスファルト塊）が多く出土しています。

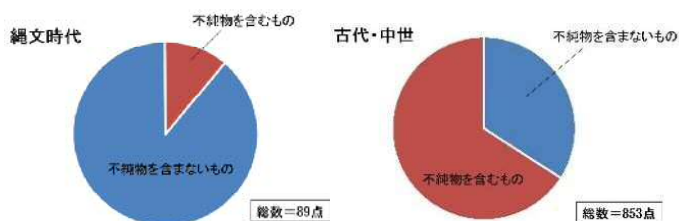
市道関連の調査分を除いたアスファルト塊の出土点数は、時代別で縄文時代が 89 点、古代（飛鳥・奈良・平安時代）・中世（鎌倉・室町時代）が 853 点、合計 942 点を数えます。また、それらの重量は、縄文時代が 5,197.9 g、古代・中世が 21,922.0 g、合計 27,119.9 g を計ります。

縄文時代と古代・中世のアスファルト塊を比較すると、縄文時代の方が古代・中世に比べてサイズが大きい傾向にあります。なお、古代・中世には縄文時代の 10 倍近くの点数が出土しており、総重量も 4 倍近くになることなどから、縄文時代よりも古代・中世にアスファルトの利用が盛んに行われた状況が推測されます。



大沢谷内遺跡出土のアスファルト塊の点数・重量

また、アスファルト塊の性状については、縄文時代は不純物を含まないものが多いのに対して、古代・中世になると不純物を含むものが多い傾向がうかがえます。このことから、縄文時代と古代・中世とでアスファルトの精製や使用形態が異なっていた可能性も推測されます。



大沢谷内遺跡出土のアスファルト塊の性状

縄文時代の大沢谷内遺跡

大沢谷内遺跡や大沢谷内北遺跡では、縄文時代晩期の中頃から後半の遺構や遺物が確認されており、その時期に人々が活動していたことが分かります。また、時期によって活動域に変化がみられ、晩期の中頃には大沢谷内遺跡1～4区が活動の中心域で、その後、大沢谷内北遺跡へと活動域が変化します。さらに、晩期でも後半になると、大沢谷内遺跡5・6区へと活動の中心域が移動します。

各時期の建物跡をみると、縄文時代晩期の中頃には竪穴建物11棟、掘立柱建物7棟が検出されており、縄文時代晩期の後半には竪穴建物2棟、掘立柱建物6棟が検出されています。

縄文時代晩期の竪穴建物は、長軸長で約3.0～7.5mを測り、大半は円形の平面形です。また、掘立柱建物の多くは母屋面積10㎡未満の小型の建物で、小屋など簡素な建物が想定されます。

他に土が焼けた焼土遺構も多く見つかっています。晩期の中頃で42基、晩期の後葉で60基が確認されています。焼土遺構からは魚骨などの焼骨が出土するケースが多く、遺跡の性格を考える上で多くの示唆を与えてくれます。



縄文時代の竪穴住居



縄文時代の掘立柱建物

縄文時代の焼土遺構

大沢谷内遺跡で99基、大沢谷内北遺跡で3基の土が焼けた遺構（焼土遺構）が確認されています。焼土遺構の中には被熱土が1m以上に広がり、焼土と被熱層の厚さが8cmに達するものも存在します。また、焼土が間層を挟んで上下2つの層で確認できる焼土遺構も存在することから、異なる時期に形成されたものも存在することがうかがえます。なお、焼土遺構の分布を見ると建物周辺に形成される傾向にあることから、活動域の近辺でそのような行為を行っていたことが分かります。



縄文時代の焼土遺構

焼土遺構の中には焼骨が出土したものもあります。焼骨は魚骨が大半を占め、中でもトゲウオ科やサケ科を主体とする河川に生息もしくは通し回遊をするものが多いことが判明しています。トゲウオ科やサケ科の骨には大型魚の骨以外に、小型魚の骨も多く存在することから、何回かの特定の時期に集中的に獲得



大沢谷内・大沢谷内北遺跡平面図（縄文時代）

【魚類】

分類	点数
トゲウオ科	2,610
サケ科	1,369
コイ科	5
ハゼ科	3
トビエイ類	2
その他	192

コイ科・ハゼ科・トビエイ類・その他
13%

トゲウオ科 46%

リケ類 41%

大谷寺内流池の魚類重量組成
(n=5,574)

焼土遺構から出土した焼骨の 分類別点数と魚類重量組成

Category	精光土器 (%)	粗光土器 (%)	n
大平原內遺跡5~7區 (新石器時代晚期至商代)	26.3%	73.7%	172
大平原內北遺跡 (商代中期)	77.0%	23.0%	100
大平原內遺跡1~4區 (新石器時代早期至商代中期)	76.7%	23.3%	100

大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡における精製土器と粗製土器の内訳

大沢谷内北遺跡
(岡岡博士・佐藤千栄)

大沢谷内遺跡の96号下層
(鎌文子氏・佐藤千栄)

大沢谷内遺跡の1号下層
(岡岡博士・佐藤千栄)

■ 土器で資料の遺跡・遺層1に用いた土器
(左: 粗・右: 精など)

■ 工部局に付属の民・官邸
(緑: 粗・右: 石・石・粗・粗など)

■ 事務所・官舎の土器
(左: 粗・右: 粗・粗など)

大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡出土の石器組成

縄文時代晩期の中頃から後半にかけて、活動の中心域が大沢谷内遺跡の1～4区から大沢谷内北遺跡へ、さらに大沢谷内遺跡5・6区へとめまぐるしく移動した背景には、そのような大沢谷内遺跡周辺の環境が大きく影響していた可能性が推測されます。

弥生・古墳時代の大沢谷内遺跡

弥生時代・古墳時代の大沢谷内遺跡については、今のところ発見された遺構や遺物が少ないためによく分かっていません。当時の環境については、花粉分析などの結果、縄文時代と共通する点が多い一方、イネが定量認められるなど異なる点もあります。イネの花粉の存在は、当時周辺で稲作を行っていた可能性を示します。

これまでに出土した弥生・古墳時代の遺物は、農道部の調査で弥生時代後期の土器が少量出土しているほか、1～4区で弥生時代後期と古墳時代前期の土器が、5区で古墳時代前期の終わり頃の土器が、11区で古墳時代中期の土器が僅かに出土しています。また、土器以外では8区出土のヒスイ製の勾玉は、形態から弥生時代あるいは古墳時代の可能性があります。

遺構については、弥生時代の確実な遺構は確認されておらず、古墳時代の遺構も非常に少ない状況です。出土遺物の分布や他遺跡の立地などから、弥生時代・古墳時代の主な活動域は、遺跡のさらに北側もしくは新津丘陵のある東側に存在する可能性が推測されます。今後の調査で弥生・古墳時代の状況も次第に明らかになるでしょう。

飛鳥時代の大沢谷内遺跡

飛鳥時代の7世紀後半になると1～4区を中心に、役所に関連する官衙関連遺跡として集落が出現・形成されます。飛鳥時代の遺構としては、掘立柱建物6棟のほか、井戸や溝、杭列、谷へ下る斜面域で祭祀関連遺物や土器がまとまって出土した遺物集中遺構などが確認されています。この時期は淳足柵が造られた時期でもあり、南約1.5kmに位置する同時期の行屋崎遺跡（田上町）とあわせて注目されます。



飛鳥時代の木簡・土器・土製品・木製品

大沢谷内遺跡における飛鳥時代の出土品は多岐に及びますが、円面硯や「九九」木簡、斎串・刀形・鏃形・舟形・弓形といった木製祭祀具などは、律令祭祀を執り行った官的性格の遺跡であることを示しています。また、アスファルト塊も出土しており、石油資源を利用していたことも確認できます。日本書紀には天智7（668）年に越国から「燃水・燃土」が献上とあります。その供給地の特定は今後の課題ですが、大沢谷内遺跡が飛鳥時代に官衙関連遺跡として出現・展開した背景には、油田地帯や丘陵地に近接するなどの地理的要因も大きかったと考えられます。

古代（奈良時代・平安時代）の大沢谷内遺跡

大沢谷内遺跡でこれまでに確認されている遺構や遺物の分布などから、飛鳥時代には1～4区周辺が活動の中心域と考えられますが、奈良時代の後半（8世紀後半）になると1～4区にかわり、深さ3m、谷幅100m前後と推定される谷を隔てて南側の8・9区が活動の中心域となります。



平安時代の掘立柱建物

奈良時代、平安時代の遺構には、掘立柱建物22棟や井戸20基のほ

かに、8・9区の微高地周辺において水田や畑といった耕作関連遺構などが確認されています。

越州窯系青磁は、出土遺跡が非常に限られる珍しい品物です。また、花卉文様が線刻された円面硯や、内面に渦巻き状の暗文を描いた黒色土器、灰釉陶器、石帯なども当時の希少品といえ、奈良時代・平安時代においても大沢谷内遺跡が一般集落とは異なる有力な遺跡であったことが分かります。

また、丸木舟を転用した井戸側からは、当時の活発な内水面交通の状況がうかがえます。土錐も出土しており、周辺の河川や湿地では漁撈を行っていたと考えられます。なお、鉄斧は木材の伐採や加工に使用したと推測され、木製の未成品も出土しています。さらに、漆要具や羽口も出土しており、丘陵に近い地理的要因を背景にさまざまな生産活動を行っていたことがわかります。

奈良時代、平安時代の大沢谷内遺跡は、飛鳥時代に引き続き、有力者層の集落であるとともに、丘陵に近く、河川や湿地にも通じた地理的条件を背景として、様々な手工業生産や農耕・漁撈活動を行っていたと考えられます。また、多量のアスファルト塊は石油資源が生業の一つとして活発に利用されていた状況を物語ります。



花卉文様が線刻された円面硯



石帯



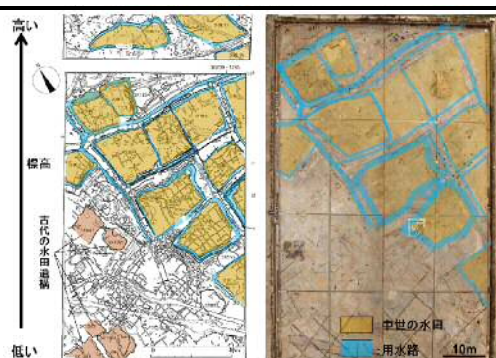
暗文を描いた黒色土器

中世（鎌倉時代・室町時代）の大沢谷内遺跡

中世も引き続き8・9区の微高地が活動の中心域となっています。中世の遺構は、掘立柱建物21棟や井戸100基以上のほか、微高地周辺の低地において広範囲に整然と区画された水田や畑の跡が確認されています。

出土品では、骨角製の筭や栗形、一定量の漆器の椀や盤、青磁や白磁、木製の刀子鞘、金属製の蓋状器物などは当時の優品といえます。また、木製の田下駄や鍬などの農具も出土しています。なお、木製の未成品の下駄や皿、結合用樹皮も出土しており、木製品の製作が行われていたと判断されます。さらに、アスファルト塊は古代以上に多量に出土しており、石油資源の活発な利用がうかがえます。ちなみに、2基の井戸で井戸側に使用したアスファルト付着の曲物が出土しており、これらは油井の可能性もあります。他には鉄製の釣針が出土しており、周辺で漁撈も行っていたことが分かります。

中世の大沢谷内遺跡は、古代同様、農耕を中心に漁撈活動も行い、さらにその地理的条件を背景として木製品の製作や石油資源の活発な利用など多様な手工業生産を行っていた有力な集落であることが分かります。



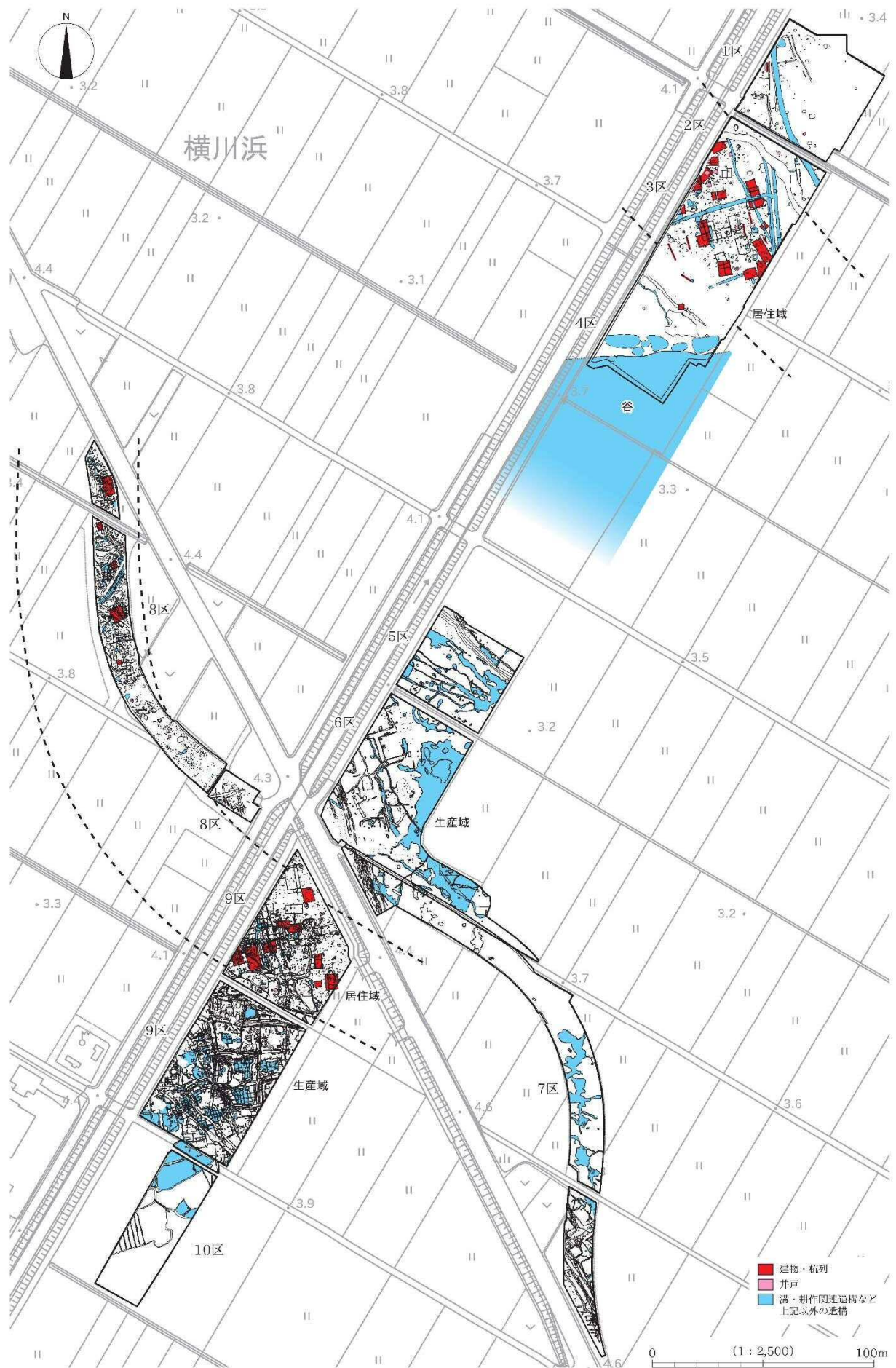
中世の水田遺構平面図・写真



中世のアスファルトが付着した曲物と鍬



中世の未成品の下駄・皿と結合用樹皮、筭



大沢谷内遺跡平面図（飛鳥時代・奈良時代・平安時代）

飛鳥時代～中世の大沢谷内遺跡周辺の環境

花粉分析の結果、飛鳥時代から中世にかけて大沢谷内遺跡周辺では、ハンノキなどの湿性樹木やコナラなどの落葉広葉樹、スギ林が分布していたと考えられます。なお、大沢谷内遺跡で出土した飛鳥時代から中世の木製品の材はスギが圧倒的に多い状況です。

飛鳥時代の農耕関連の確実な遺構は検出されていませんが、植物珪酸体や花粉分析から、周辺で水田耕作を行っていたと推測され、農具の鋤も出土しています。奈良・平安時代、中世においては、畑や水田の遺構が多く確認されています。植物珪酸体分析や花粉分析でも、イネ・イネ科が高い検出率を占めており、種実同定でも遺構から炭化米が出土しています。

また、イネのほかにムギ類やソバ属も確認されている他、アワ、ウリ、ヒョウタン、ナス、エゴマなどの栽培植物も多く確認されています。なお、古代・中世ともモモの種実も多く出土しています。

以上、植物珪酸体や花粉、種実同定などの分析結果は、確認されている水田や畑の遺構の分布状況と整合した内容といえます。

花粉分析による樹木花粉トッピング (時代別)			種実同定による草本種実トッピング (時代別)	
縄文時代	弥生・古墳時代	古代・中世	古代	中世
1 ハンノキ属	ハンノキ属	ハンノキ属	1 ウリ類	イヌビエ属
2 ブナ属	スギ	スギ	2 オコバ属	イネ
3 コナラ属コナラ亜属	コナラ属コナラ亜属	コナラ属コナラ亜属	3 スダゲ属	アワ
			4 ホタルイ属	キカラスウリ
			5 タデ属	ウキヤガラ
			6 カナムグラ	アサ
			7 ナス	マメ科
			8 キタキリ	ホタルイ属
			9 ヒョウタン類	シソ属
			10 ツリフネソウ	ササゲ属
			11 トウガラシ	タデ属
			12 マメ科	ナス
			13 イネ	ウリ類
			14 ウキヤガラ	スダゲ属
			15 イヌホウズキ	エゴマ

大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡の花粉・樹種・種実

井戸の祭祀

現在でも井戸を掘ったり埋める際にお祓いをすることがあります。このような井戸に関わる祭祀行為は、古くは弥生時代に見られ、水（または水脈をもつ土地）に対する畏敬の表れと考えられています。弥生時代や古墳時代には井戸底から完全な形の土器が出土したりしますが、飛鳥時代や奈良時代にはそれに加えて斎串や形代などの律令祭祀遺物の出土も多くなります。また、モモの種が出土する例も多く、祭祀との関連が指摘されています。

大沢谷内遺跡では、飛鳥・奈良・平安時代の井戸 42 基のうち 5 基で井戸底から完形土器が出土しました。完形土器が出土した井戸は、幅が大きかったり、深かったりする傾向にあり、さらにそのうちの 3 基では丸木船の転用材や板材を井戸側にするなど特別なつくりの井戸でした。古代の大沢谷内遺跡では、規模が大きな特定の井戸でのみ完形土器を用いた祭祀を行ったことが推測されます。

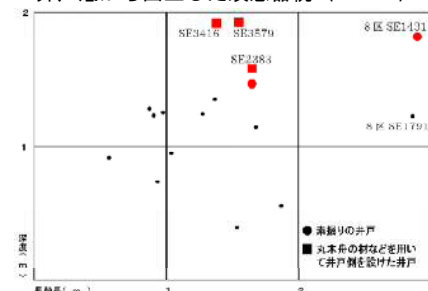
ちなみに、鎌倉・室町時代の井戸底からは、完形土器ではなく、完形の漆器碗が出土しています。このことから、大沢谷内遺跡では中世になると、完形の土器から漆器碗へと井戸底の祭祀具が変化した可能性が推測されます。



平安時代の井戸断面 (SE2383)



井戸底から出土した須恵器碗 (SE2383)



大沢谷内遺跡の古代井戸の長軸長と深度
(赤塗りは底から完形土器が出土した井戸)



大沢谷内遺跡平面図（鎌倉時代・室町時代）

大沢谷内遺跡における土地利用の変遷

大沢谷内遺跡、大沢谷内北遺跡の土地利用の変遷をまとめると、縄文時代晩期中葉には大沢谷内遺跡 1～4 区→大沢谷内北遺跡の順に利用され、晩期後葉になると 5～7 区で活動が認められます。この時期は特殊なキャンプ地のような性格で利用されていた可能性があります。

その後、弥生・古墳時代は不明瞭ですが、飛鳥時代の 7 世紀後半には 1～4 区を中心に官衙関連の集落が形成され、さらに奈良時代の後半（8 世紀後半）から 14 世紀頃までは、8・9 区を中心に公的な性格をもつ有力な集落が営まれます。遺跡の形成には、古代以降、沖積地が安定してきたことや、川辺で、近くに丘陵や油田帯が存在するなどの立地環境が影響したと考えられます。

大沢谷内遺跡の下限は 14 世紀代と推測され、それ以降の動向は不明です。中世に堆積した未分解有機物（ガソボ）層から、遺跡周辺が中世以降に低湿な環境へと変化したことが推察されます。旧鎌倉潟など近世まで存在した周辺の潟は、この未分解有機物層が堆積した時期に形成されたとの指摘もあり、その急激な環境変化で大沢谷内遺跡の集落が廃絶した可能性もあります。

おわりに

大沢谷内遺跡が位置する新津丘陵一帯の油田地帯は新津油田と呼ばれ、大正 6（1917）年には産油量が日本一になるなど全盛期を迎え、金津村の中野貫一氏は日本の石油王とまで呼ばれました。その後、新津油田の採掘は平成 8（1996）年に全て終了しました。明治 7（1874）年から平成 8（1996）年までの約 120 年間にわたり操業された新津油田の金津鉦場跡は、我が国の近代エネルギー産業の発展を知るうえで重要な遺構が良好な状態で多く残っていることなどから、平成 30（2018）年 10 月 15 日に国史跡に指定されています。さらに、新津油田は地質学からみて日本の貴重な自然資源として、平成 19（2007）年 5 月 10 日に「日本の地質 100 選」に認定されるなど、国内外から高い評価を受けています。

大沢谷内遺跡で認められた縄文時代から中世のアスファルトの利用は、4000 年以上も前からすでに新津丘陵周辺で石油資源が利用されていたことがわかるとともに、石油が古から近代までこの地域で脈々と受け継がれてきた重要な天然資源であったことを今に伝えてくれます。

講演会と展示解説のお知らせ

関連講演会 縄文時代から中世の大沢谷内遺跡

講師 相田泰臣（文化財センター学芸員）

日時 2021年2月7日（日）13:30～15:00

会場 新潟市文化財センター（展示会場とは異なります）

定員 60名（先着）

申込み 事前申し込み 下記の「かんたん申込み」でお申込みください。パソコン・スマートフォンをお持ちでない方はお電話にて新潟市文化財センター（電話025-378-0480）までお申込み下さい。
1月6日（水曜）9:00から受付開始

申込方法

下記のQRコード
からお申込み下さい。



文化財センター学芸員による展示解説

日時 2021年2月14日（日）13:30～14:30

申込み 不要（直接、弥生の丘展示館へお越しください）